

令和 5 年 6 月 24 日現在

機関番号：33915

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2020～2022

課題番号：20K02574

研究課題名(和文)介護支援専門員の看取りに関する実務経験教育プログラムの構築

研究課題名(英文)Construction of a practical experience education program for care support specialists

研究代表者

粕谷 恵美子(KASUYA, EMIKO)

名古屋女子大学・健康科学部・教授

研究者番号：20522775

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,300,000円

研究成果の概要(和文)：在宅療養者はケアマネジャー(CM)によりサービスプランが提供されることが多い。現在、がん末期などで在宅看取りの療養者が増加傾向である。2019年の調査結果より、このような対象者へのCMの医療関係者との連携課題が明らかになった。その課題は対象者の身体変化の状況把握が困難で、病期における療養サービスが適切に提供できていないというものであった。そのため、CMに対する実務研修(看取り期療養者への医療関係者との同行訪問)の提案を考えた。研修内容の要望としては病期における経過、急変時の対応、家族への配慮、医師との意見交換などであった。これまでの成果を総括し、訪問看護師との実習プログラムを立案した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

介護支援専門員(以下CM)の医療職との連携を踏まえたCMの看取りの実務研修教育プログラムの立案は、地域包括ケアシステムを遂行していく課程で、対象者が可能な限り住み慣れた地域で生活を継続することができるよう医療と介護の連携、医療と介護の提供体制を一体的に整備するため、CMが、在宅医療と、介護保険を利用している利用者へのケアプラン作成には、患者の状態を収集し家族との関係や、思いも含めアセスメントしていく能力が育成され、CMとして医療面ではなく、介護面での支援ができるようになる実務研修プログラムの立案は在宅における看取りに意義がある。

研究成果の概要(英文)：Home care recipients are often provided with a service plan by certified care manager (CM). Currently, the number of home care recipients is increasing due to the terminal stage of cancer. Our 2019 survey results have clarified cooperation issues of End-of-Life care between medical personnel and certified CM. The problem was that it was difficult to grasp the physical changes of the subject and it was not possible to properly provide home care services during the stage of the disease. Therefore, we considered a proposal for practical training for CM (Visiting home care recipients with medical personnel). Requests for training content included "progress during the disease stage", "response to sudden changes", "consideration for family members", and "exchange of opinions with doctors". Summarizing the results so far, we drafted a program for practical training with home-visiting nurses.

研究分野：看護

キーワード：介護支援専門員 看取り 実務研修 連携

1. 研究開始当初の背景

地域包括ケアの構築に対応するため、「人生の最終段階における医療の決定プロセスに関するガイドライン」が改訂され、ガイドラインでは、医療・ケアチームの対象に介護従事者が含まれることの明確化や、心身の状態の変化等に応じて、本人の意思は変化しうるものであり、医療・ケアの方針、どのような生き方を望むか等を、日頃から繰り返し話し合うこと(Advance Care Planning: ACPの取組)の重要性が強調された。今後は、地域包括ケアは在宅の看取りをセットで考え、地域で支えることが通例化するだろう。このような背景から、介護支援専門員(care manager: 以下、CM)は、医療・ケアチームの一員として、利用者の人生の最終段階における在宅での看取りにかかわる。地域包括ケアシステムを遂行していく課程では、対象者が可能な限り住み慣れた地域で生活を継続することができるよう医療と介護の連携、医療と介護の提供体制を一体的に整備し、CMが看取りの過程で果たす役割と責務が果たせることが課題である。

CMが、医療と介護保険を併用している利用者へのケアプラン作成には状態を把握し家族との関係や思いも含めアセスメントしていく能力が求められ、医療面ではなく、生活面での支援ができるようにすることが必要である。本研究では、福祉系のCMが在宅で終末期を迎える利用者にとって有意義なケアプランの作成の一助となることを目的とし訪問看護師に同行する在宅看取り実務研修教育プログラム現在、ケアマネージャー(以下CM)の研修科目に講義では、「ケアマネジメントに必要な医療との連携および多職種協同の実践」や講義・演習では、「看取りにおける看護サービスの活用に関する事例」が新たに加えられている。また、地域包括ケアシステムの中で「医療との連携を初めとする多職種協働を実践できるCMの養成を図る」として法定研修の受講が義務付けられるようになってきている。しかし、看取りの実務研修を実施するまでに至っていない。そこで、CMが実務研修をどのように考えているのかを質問紙による調査とインタビュー調査を行い実務研修プログラムの作成を目的とした。

2. 研究の目的

福祉系のCMが在宅で終末期を迎える対象者のケアプランの実態・意識調査をし、CMの在宅看取り実務研修教育プログラムを作成することを目的とした。

3. 研究の方法

第1段階として、A県のA市内の介護ネットに登録されている介護支援事業所672事業所に質問紙を送付し372の回答を得た。

1) データ収集期間: 第1段階 2020年8~10月

第2段階 2021年4月~6月

2) データ収集方法: 第1段階: 郵送法による無記名自記式質問紙調査法

第2段階: A地域、居宅介護支援事業所の介護福祉士資格CM10名

3) 研究対象: 東海地方A市の事業所に勤務する介護支援専門員。

4) 調査内容: 基本属性(年齢・性別・介護支援専門員経験年数)、介護支援専門員資格を取得する前提となった基礎資格、介護支援専門員としての看取り経験の有無²⁾、“介護支援専門員として看取りを担当する際に求める教育支援”とした。第1の分析方法は、各項目の基本統計量を算出し、クロス集計の上で²⁾検定・残差分析を行った。有意水準は5%に設定した。統計ソフトは、IBM SPSS Statistics Ver.23を使用した。

次に「看取り期への援助でどのようなことに困難を感じているのか」に関する自由記述を逐語録に起こしコード化し質的帰納的分析を行った。

第2段階のインタビュー調査では、これまでの報告内容で、CMが療養者にかかわる時期により医療者との連携における満足度が違うことが明らかになっている³⁾。そのため、介護保険サービスを利用していた在宅療養者に看取り時期が迫り、医療連携が必要になる療養者(A群)と医療関

係者より依頼されて介護保険サービスの利用が開始になる療養者（B群）にて2群に分類した。その後、CMの語りからサービス提供満足度に対する評価を客観的に確認するために、NTTデータ数理システム Text Mining Studio 6.3(TMS)の「評判抽出」にて処理を行った。出現頻度の高い単語の原文を基に研究者間で検討し、連携課題をみいだした。

4. 研究成果

1) CMの実務研修の希望内容

第1段階の質問紙調査では、看取りの実務研修の希望は、182名（49%）希望しない44名（13%）わからない129名（35%）無回答11名（3%）であった。実務研修での同行者には、在宅医112名（30%）訪問看護師276名（74%）介護支援専門員68名（18%）を希望しており、希望同行件数は2~3件が多かった。また、介護支援専門員が在宅で看取りを行う上で求める教育的支援では、“病気の経過”が全対象者中248名（72.5%）と最も多く、基礎資格が看護師・准看護師はそれ以外の基礎資格の介護支援専門員と比較して有意に少なかった（ $p < 0.05$ ）。また、2番目に多かったのは“疼痛管理”で全対象者中186名（54.4%）であった。“疼痛管理”の教育的支援を求めている者は、介護支援専門員として看取りの経験のある者が有意に少なかった（ $p < 0.05$ ）。3番目に多かったのは“医療的処置”で全対象者中158名（46.2%）であり、4番目に多かったのは“治療内容”で全対象者中158名（46.2%）であり、5番目は“呼吸の変化”、“意識状態の確認”が同数で151名（44.2%）であった。

質的帰納的分析結果では、CMが「看取り期への援助でどのようなことに困難を感じているのか」の自由記述のコード数は、288であった。以下、カテゴリーは【】、サブカテゴリを<>で示す。

【介護保険制度上の問題】【終末期の段階に合わせた療養環境整備の困難】【終末期の看取り期の経過の知識不足による不安】【家族支援の困難】【CMとしての役割の限界】【医療者との情報共有と連携の困難】の6個のカテゴリーが得られた。【介護保険制度上の問題】は、<介護申請手続きの問題><介護申請・認定にかかる時間的問題>。【終末期の段階に合わせた療養環境整備の困難】は、<必要物品・人員の調整と確保の問題><療養環境の整備の問題>。【終末期の看取り期の経過の知識不足による不安】は、<医療的ケアと急変時の対応困難><看取り期の経験と知識の不足>。【家族支援の困難】は、<家族の負担と看取りに対する不安への支援の戸惑い><家族の援助困難や意見の相違に対する支援の戸惑い><情報不足による支援の困難>。【CMとしての役割の限界】は、<独居・介護者の支援への戸惑い><CMの力量による人間関係の構築と判断の戸惑い>。【医療者との情報共有と連携の困難】は、<在宅移行時の病院からの情報不足による問題><医療的ケアが中心となることによる看取りに対する思いの相違と疎外感><医師との連携が十分に取れないことへの不満>から得られた。

2) CMの連携課題

平均年齢は48.2(SD5.50)歳、平均CM経験は9.2(SD4.71)年であった。看取り経験は研究協力者の担当全事例数が40例で、看取り担当件数10件のCMもあったが、ほとんどのCMが2件前後の担当経験であった。

担当事例数の内、実際に語られた延べ事例数はA群8件、B群11件であった。

A群は延べ単語数1980語、単語種別数772種類に分類された。評判抽出結果はa:【先生】という単語の頻度が高かった(図1)。a:【先生】を含む原文には「看護師さんが泌尿器のa1)先生と話してくれた」「やっぱり看護師さんがすごいと思ったのが、ご本人とか

家族が言うとa2)先生に伝わりにくい医学的なことが、ちゃんと言ってくださっていたので薬が処方された」「a3)先生と訪看さんも連絡取り合ってもらったので」「訪看さんに相談したら、分かった、分かった、じゃあ、一回行って、a4)先生と直接話すねっていう風に言ってくださった」などであった。B群は延べ単語数3767語、単語種別数1149種類に分類された。評判抽出結果(図2)はb:【申請】が好評語として高くとらえられている。これらの単語を含む原文には「元気だったから、多分、今までb1)申請しなかったんだらうねって」「意外と元気な時にb2)申請をしたら、軽いんですよ、で認定後1ヵ月、下りる頃にはだいぶ落ちて、もうひやひやしなが

らちゃんとできるかなとか言いながら」「がんは本当にコーンって来るじゃないですか。意外と元気な時に b3)申請をしたら、軽いんですよ」という内容である。連携やサービス内容の単語からは c:【訪問看護師】d:【サービス変更】が不評語として上がっている。c:【訪問看護師】では「c1)訪看さんに指定されたくて在庫がないマットを指定されたりとかしてたので」「ケアマネが介護福祉士だと医療の知識がないので、c2)訪看さんから、今の状況からすると、こういうことが考えられるんじゃないか・・・」「c3)訪看も、もともと入院されてた病院の c4)訪看が決まっていた状態」「c5)訪看によっては連絡がなかなかくれなかったり」などであった。また、d:【サービス変更】では「d1)サービス提供が追い付かない」「介護の d2)サービスがスタートしたんですけどなかなか入れてもらえない」という原文内容であった。A群とB群では単語頻度に違いがみられた。A群では医師との連携に困難意識があるが、看護師との連携により必要な情報は得られているとの認識である。B群では医師・看護師ともに連携困難の認識がある。福祉系 CM が身体状態を把握することは困難であり、身体機能の情報が得られにくく、サービスの準備が適切にできていないと感じている。CM はサービスを適切に提供するという医療関係者とは違う役割である。主治医の意見書に事前に「進行性かつ治癒困難な状態にあるがん」であることや「症状として不安定である」ところにチェックがあれば、区分変更をかけなくてもレンタルの対応ができる。身体機能が急激に低下し、CM が予測困難な B 群対象者では、特に、これらの内容を医療関係者が認識し、書類の準備や、身体機能低下の情報共有が重要課題であることが明らかとなった。

3) 実務研修プログラムの作案

大段階と第 2 段階で得られた結果から、医療的処置を訪問看護師に同行し観察・確認する項目は、質問紙で得られた医療的処置 18 項目のうち上位 10 項目を選定した。「病気の経過観察と確認」「疼痛管理方法の確認」「医療的処置の見学」「昏睡状態の確認」「呼吸の変化の観察」「栄養管理方法の観察」「麻薬の内服管理方法の確認」「麻薬の貼付管理の確認」「麻薬の持続注射管理の確認」「血圧・脈拍の変化の観察方法と確認」である。次に観察項目に関し観察・確認時には訪問看護師から観察の視点を聴取し、指導事項を記録に残すようにする。また、病期における経過、医療行為の留意点、急変時の対応、家族への配慮など医療者側の対応についても説明を受け記録する。介護系の CM は医療用語がわからないため訪問看護師と距離をとっていることが明らかになってきたことから、何をどのように観察・確認し実施しているのかを知る機会とする。実施期間は、1 週間程度の研修が好ましいとの回答から、継続した療養者の観察が困難であることを考慮し 4~7 回を 1 か月の期間で経験できることを目指すこととし、介護系の CM の在宅看取りの実務研修教育プログラムとして作案したが、COVID19 の蔓延により実務研修が実施できず最終的な評価に至ることができなかった。したがって、本プログラムの実務研修を今後実施していく予定である。

5 . 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計0件

〔学会発表〕 計8件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 4件）

1 . 発表者名 Emiko Kasuya, shigeko iimori, kumiko hayashi, yuko shiba, hisko horiguti
2 . 発表標題 A Survey about Care Managers ' Preference for Accompanying Persons to Take Part in End-of-Life Care Training in Japan
3 . 学会等名 East Asian Forum of Nursing Scholars (EAFONS) 2021 (国際学会)
4 . 発表年 2021年

1 . 発表者名 柴裕子、粕谷恵美子、林久美子、飯盛茂子、堀口久子
2 . 発表標題 介護支援専門員の経験年数や基礎資格の違いによる看取りの実態と意識
3 . 学会等名 第52回日本看護学会学術集会
4 . 発表年 2021年

1 . 発表者名 Hayashi.K, Kasuya.E, Shiba.Y, Iimori.S, Horiguchi.H
2 . 発表標題 Relationship between the educational support needed by care managers in providing end-of-life care at home in Japan, experiences of providing end-of life care, and acquired basic certificates
3 . 学会等名 INC2021 - The 13th International Nursing Conference (国際学会)
4 . 発表年 2021年

1 . 発表者名 Kasuya.E, Shiba.Y, Hayashi.K, Iimori.S, Horiguchi.H
2 . 発表標題 Difficulties felt by care managers in providing support for end-of-life care service clients
3 . 学会等名 INC2021 - The 13th International Nursing Conference (国際学会)
4 . 発表年 2021年

1. 発表者名 堀口久子, 飯盛茂子, 粕谷恵美子, 柴裕子, 林久美子
2. 発表標題 退院移行支援における介護支援専門員の病院連携課題 - 看取り対象者の退院支援時の困惑をTMSで分析して -
3. 学会等名 第28回日本未病学会学術総会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 林久美子, 粕谷恵美子, 柴裕子, 飯盛茂子, 堀口久子
2. 発表標題 介護支援専門員が捉える『看取り期』に関する研究
3. 学会等名 第41回日本看護科学学会学術集会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 柴裕子, 粕谷恵美子, 林久美子, 飯盛茂子, 堀口久子
2. 発表標題 介護支援専門員の看取り経験の違いによる看取りの実態と意識
3. 学会等名 第41回日本看護科学学会学術集会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 粕谷恵美子
2. 発表標題 A SURVEY ABOUT CARE MANAGERS ' PREFERENCE FOR ACCOMPANYING PERSONS TO TAKE PART IN END-OF-LIFE CARE TRAINING IN JAPAN
3. 学会等名 EAFONS2021(24th EAST ASIAN FORUM OF NURSING SCHOLARS) (国際学会)
4. 発表年 2021年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	飯盛 茂子 (IIMORI SHIGEKO) (90310599)	名古屋女子大学・健康科学部・教授 (33915)	
研究分担者	柴 裕子 (SHIBA YUKO) (20597950)	中部学院大学・看護リハビリテーション学部・講師 (33707)	
研究分担者	林 久美子 (HAYASHI KUMIKO) (30795745)	中部学院大学・看護リハビリテーション学部・講師 (33707)	
研究分担者	堀口 久子 (HORIGUCHI HISAKO) (00829963)	椹山女学園大学・看護学部・助手 (33906)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------